

アフリカにおける学際的・共同的研究の可能性を議論

ユネスコ・パートナーズ・フォーラム

ユネスコチェアとして初参加

国連教育科学文化機関(ユネスコ)とさまざまなパートナーとの協力のあり方を議論する「ユネスコ・パートナーズ・フォーラム」が9月30日～10月2日にアフリカ連合本部(アジスアベバ)で開催され、総合人間科学部教育学科の杉村美紀教授とSophia Future Design Platform推進室の山崎瑛莉U E A (University Education Administrator)が参加した。今年、Transforming Knowledge for Africa's Futureをテーマに、アフリカにおける学際的・共同的研究を強化する目的で開催。約400人もの関係者が一堂に会した。杉村教授を責任者とする「平和と持続可能な社会を実現するための教育と研究

の推進」を目的とした本学の研究プロジェクトがユネスコに採択され、今年2月にユネスコチェアとして認定されてから初めての参加となる。

開会式ではサーレワーク・ゼウデ エチオピア連邦民主共和国大統領(当時)が挨拶を行い、本フォーラムを地域という観点からみたグローバル教育の必要性を考える機会だと強調。SDGsやアフリカのアジェンダ2063に基づき、個人をエンパワーし、イノベーションを促進して、地域のニーズに応えられる教育の枠組みを形成することを目指した議論に期待を寄せた。

本学は、杉村教授の進行のもと、特にSDGsにおける「ゴール4:教育目標の達成」に向けて具体的な活動を行っているユネスコチェアの他大学機関と共にその活動を共有し、アフリカにおける持続可能な未来のためのプラットフォーム形成に関する議論を行った。

また、会期中および滞在期間中には、各国際機関関係者との面会を通じ、本学のユネスコチェアとしての取り組みやグローバル教育の展開につい



上智大学セッションのプレゼンター・参加者



開会式会場(アフリカ連合本部)の様子

て報告・共有を行うなど、今後のさらなる協力関係について意見を交換した。今回の会議参加を契機に、今後もステレンボッシュ大学やヨーク大学、

マレーシア国際イスラーム大学などのユネスコチェア大学間の連携や共同研究などを通じて、ユネスコチェアとしての活動をさらに展開していく。

ソフィア・アントレプレナーシップ・ネットワーク(SEN)事業開始

社会課題解決に向けた実践力を身につける

本学では、社会課題解決に挑む実践的なスキルやマインドセットを学ぶ機会を提供することを目的として、11月よりソフィア・アントレプレナーシップ・ネットワーク(SEN)事業を開始した。起業意思の有無にかかわらず、社会貢献に必要とされるアントレプレナーシップ教育を通して、学生に挑戦力・企画立案力を養う機会を提供していく。

本事業の開始を記念し、全世界同時に毎年開催されている「グローバル・アントレプレナーシップ・ウィーク」を11月18日～19日にかけて日本で初めて開催。各業界で活躍中の卒業生を招いたパネルディスカッションや、ソニー株式会社元社長の安藤国威氏の特別講演会が行われた。

実業家として数々の事業を率いた安藤氏は「学生時代にアントレプレナーシップを身につけることは、将来のキャリアを形成するうえで非常に重要である。そのうえで、リーダーはメンバーの年齢や経験にとらわれず、個性を生かした役割を与えることで、プロジェクトを成功に導くことができる」と話し、社会課題解決に挑む学生にエールを送った。

また、先行して昨秋から開講している、投資運用会社スパークス・グループ株式会社協力による全10回のアントレプレナーシップ養成講座をはじめとする実践スキル系プログラムのほか、社会課題定義・解決型のワークショップ、活躍中の卒業生などのアント



卒業生を招いたパネルディスカッション



ソニー株式会社元社長の安藤国威氏

レプレナーとのネットワーキングを目的としたマインドセット系プログラムを予定。上智大学生であれば、学部や学年を問わず受講可能だ。

本事業を統括するSophia Future Design Platform推進室の川瀬崇事務局長は「学長をはじめ、多様なアントレプレナーを含めた外部有識者で構成される運営体制のもと、変化の激しい世界の現実を直視し、社会貢献や経済成長に繋がるより良い世界を目指していくための経験・機会提供と人材育成を進めていく。学生それぞれが志向するキャリアや将来見据えるビジョンに沿って、本プログラムを活用してほしい」と話している。

杉村美紀教授が次期学長に決定 創立以来初となる女性学長

現学長の任期満了に伴う次期上智大学学長の選任について、本学などを運営する学校法人上智学院は、9月30日の理事会で、杉村美紀教授(総合人間科学部教育学科)を次期学長とすることを決定した。大学創立以来、初の女性学長の就任となる。任期は2025年4月1日から29年3月31日までの4年間。

上智学院では、16年1月に「上智大学学長の選任に関する規則」を改正し、学長選出方法を変更した。同改正によって、候補者選考委員会委員に加え、教職員も学長候補者を推薦できるようになった。候補者選考委員会がこれらの被推薦者の中から対象者を絞って面接を実施し、最終的に学長候補者2人を選定した。

その後、教職員が候補者を評価する「学長候補者に係る調査」が行われ、その結果を理事会が参考にして、次期学長を選定した。

杉村教授は、1962年生まれ、62歳。85年お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒。87年東京大学大学院教育学研究科学校教育学専攻修士課程修了。92年同専攻博士課程



杉村美紀教授

単位取得満期退学。98年12月博士(教育学)の学位を取得(東京大学)。専門は比較教育学、国際教育学、多文化教育論。

本学文学部教育学科専任講師を経て、07年より総合人間科学部教育学科准教授。13年同教授。これまでに学術交流担当副学長、グローバル化推進担当副学長などを歴任。

ユネスコが世界の知の交流と共有を図るために認定する「ユネスコチェア」に採択された本学の研究プロジェクトを牽引するほか、学外ではJICA緒方貞子平和開発研究所の客員研究員や国連大学サステナビリティ高等研究所の客員教授なども務めている。

第22回国連Weeks 植木安弘教授が成果を振り返る

10月7日から24日まで、「第22回上智大学国連Weeks」が開催された。「国連の活動を通じて、世界と私たちの未来について考えよう」というコンセプトのもと、11年目を迎えた今回も、平和構築、人道支援、気候変動など幅広いテーマでシンポジウムなどが企画された。在学生のほか、高校生や一般の方も含め、来場・オンライン合わせて参加者は約1,300人に達した。

国連の広報局や事務総長報道官室などの業務に約30年従事し、現在は国際協力人材育成センター所長として国連Weeksを牽引した植木安弘教授(グローバル・スタディーズ研究科)とともに今回のイベントを振り返る。

世界の分断化と多極化が進み国益重視傾向が強くなる中で、地球規模の課題にどう取り組んでいけば良いのか、グローバルな視点とローカルな視点から重層的に問題を考えました。

まず「ガザの新たな平和と復興」では、いまだ止まぬ戦争とその後の平和と復興について国連開発計画(UNDP)の事務次長補らとともに考えました。

他方、いまだに続くさまざまな地域や国での紛争下で起こる戦争犯罪や人権侵害について、国際刑事裁判所などの国際司法機関や国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)などの役割とともに議論しました。

SDGsに関するシンポジウムでは、二酸化炭素排出削減やフードロスなどの問題について、持続的発展を維持するための最先端の研究紹介に加え、2050年のカーボンニュートラル社会実現に向けたローカルなレベルの取り組みを地方自治体や企業の代表の方々に説明していただきました。気候変動の深刻さについては、元国連事務次長のフランツ・バウマン博士の基調報告で明らかにしていただきました。

さらに、気候変動や戦争などで多くの課題に直面している世界遺産の現状と、その知的財産が持続可能な開発や環境保全の促進にどのように貢献できるかについて、ユネスコ世界遺産センターのホサガハル次長などとともに議論を深め、「世界遺産のモノローグ」の展示も行われました。

国際協力・国際機関キャリアセッションでは、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の駐日代表の基調講演や国連訓練調査研究所(UNITAR)そして経済協力開発機構(OECD)による特別講演の後、本学国際協力人材育成センター(SHRIC)のアドバイザー・ネットワークの方々や外務省国際機関人事センターによる対面でのクロストークがあり、学生や一般の方に加え多くの高校生も参加し、活発な意見交換が行われました。

10月24日の国連デーには、アントニオ・グテーレス国連事務総長のメッセージを国連広報センターの根本かおる所長に紹介していただき、その後、人道支援におけるイノベーションの必要性を国連機関(UNHCR、UNICEF、WFP)の代表を交えてともに考えました。

ほとんどのセッションは対面とオンラインのハイフレックスで行われ、質疑応答も含め活発な議論が行われました。多くの大学生や社会人に加え、高校生の参加者も交えて、さまざまな問題をともに考える良い機会となりました。

公式ウェブサイトにてイベントレポート掲載中



植木安弘教授

大学対抗交渉コンペティションで快挙 国内外の強豪校を抑え 2位入賞

11月16日・17日の2日間にわたり上智大学が後援する第23回インターカレッジ・ネゴシエーション・コンペティションが開催され、本学チームが総合2位入賞を果たした。この大会は、日本語または英語で模擬仲裁・模擬交渉を行う大学対抗戦で、例年、上智大学四谷キャンパスで行われている。

大会には、日本の20大学とオーストラリア、韓国、シンガポールなど海外からの9大学、合計約300人が参加し、150人を超える国内外の実務家・研究者などからなる審査員団を前に、熱戦を繰り広げた。

本学からは、法学部国際取引法ゼミ19人のチームが参加し、総合成績で29チーム中2位という本学歴代最高の成績を収めた(優勝:チーム・オーストラリア、2位:上智大学、3位:シンガポール国立大学、4位:東京大学、5位:大阪大学)。また、日本語の交渉の部では1位、日本語の部の総合順位で東京大学に続いて2位、英語の部の総合順位でチーム・オーストラリア及びシンガポール国立大学に続いて3位(日本の大学でトップ)を獲得した。

上智大学チームに参加した深江夏蓮さん(法法4)は、「この国際大会は、ゼミで学んだことを発揮できる集大成の場です。チームの仲間と同じ目標に向けて力を合わせ、大きな成果を収められとても嬉しく思っています。交渉



暁道学長(右端)への成果報告

や仲裁で最も大切なことは、自分の主張だけでなく、常に相手の立場に立って全体利益を考えること。そして、相手の出方を見て臨機応変に対応する難しさもありますが、チームで何度もシミュレーションし、幅広い視点や高い視座で物事を考えられるようになりました。この経験を、社会に出てから多様な立場の方と対話をするうえで役立てたいと思います」と話した。

指導教員の森下哲朗教授(法学部国際関係法学科)は、「1年前には人前で発表することさえ躊躇していた学生が、初めて会う海外の学生や審査員の前で堂々と意見を戦わせ、このような大きな成果を収めたことを誇りに思います。教員の知らないところで何度も議論を重ね、ときには仲間と言い合いになったり涙を流したりするなかで成長できたこと、そしてこのような大舞台で、チーム全員で力を合わせて楽しめたことは、学生にとって大きな人生の財産になると思います」と語り、大会を振り返った。

2025年度学費決定

2024年7月開催の理事会において、2025年度の学部・大学院の学費が決定しました。詳細は上智大学学内向けウェブサイトピロティに公開中ですので、ご確認ください。

▶ウェブピロティ

<https://piloti.sophia.ac.jp/jpn/tuition/>



ザビエルウィーク 世界クリスマス発見!

11月28日から12月2日にかけてザビエルウィークが開催された。本イベントは「上智大学の創立理念とカトリックアイデンティティを思い起こすこと」を目的とし、上智大学カトリック学生の会主催で毎年開催されている。

11月29日には、テーマ「世界クリスマス発見!」に基づいたパネルディスカッションが行われた。サリ・アガスティン理事長、神学部のホアン・アイダール教授や片山はるひ教授などが各国のクリスマスにまつわる文化や習慣について紹介した。

アガスティン理事長の育ったインドのケララ州、真夏にクリスマスをお祝いするアルゼンチン、カラフルな色合いのサントン人形が欠かせないフランス・プロヴァンス地方など、多種多様なクリスマスの祝い方が紹介された。

後半の質疑応答では、参加者から各国のクリスマスの料理や馬小屋制作の慣習についてなど、質問が活発に飛び交った。最後に登壇者へカトリック学生の会からお礼の品が手渡され、温かな雰囲気では終了した。



故郷のクリスマスを語るアガスティン理事長

上智大学コロンビアデー

食や文化を通じてコロンビアの魅力を感じ取る1日に

10月17日、上智大学で「コロンビアデー」が開催された。このイベントは、2023年10月に暁道佳明学長がコロンビア共和国の協定校である教皇立ハベリアナ大学を訪問した際、「コロンビアでの研究や留学に対する関心を高める機会を作ってほしい」と要望されたことを受けて企画された。

冒頭、来校したアンヘラ・ドゥラン同国臨時代理大使は、コロンビアデー

開催への謝意を示すとともに、このイベントがコロンビアの多様で豊かな文化を知ってもらう機会になることを願っていると述べた。続いて、駐日コロンビア大使館のパブロ・カルドナ三等書記官が登壇し、「コロンビアの魅力を発見する」というテーマで、同国の文化や歴史、驚異的な生物多様性について講演した。

その後は映画上映会が行われ、内戦



コロンビアの伝統的な料理やコーヒーが振る舞われた

に苦しみながらも平和のために戦う女性たちの姿を描いた作品や、ラテンアメリカで最初の自由都市サン・バシリオ・デ・パレンケの音楽家について描いた作品が上映された。

イベントの最後には、駐日コロンビア大使館の協力でコーヒーの試飲とスナックの試食が行われた。同国のコーヒー生産者連合によって選ばれたスペシャルティコーヒーが提供されたほか、エンパナーダやココアダなどの伝統的な料理が振る舞われた。

学生たちが大使館職員に展示された写真をもとに各地域の違いや食文化について質問する姿も見られ、参加者は食を通じた文化交流を楽しんだ。



アンヘラ・ドゥラン駐日コロンビア臨時代理大使の挨拶



パブロ・カルドナ三等書記官のプレゼンテーション

2024年度創立記念行事

先哲祭ミサ、永年勤続者表彰、創立記念プログラム

11月1日、上智学院創立記念行事として先哲祭ミサ、永年勤続者表彰、創立記念プログラム、懇親会が開催された。

■先哲祭ミサ

聖イグナチオ教会主聖堂で、サリ・アガスティン神父(上智学院理事長)の主司式にて行われた。「上智学院の発展のために尽力された先哲の働きに感謝し、積み上げられた実りをふさわしく受け継ぐことができるように」との祈りが捧げられた。

■創立記念プログラム・懇親会

「互いを知る、上智を語る、未来を考える」のテーマのもと、対面とオンラインを取り交ぜた5つのプログラムが実施された。プログラム名は別表の

とおりで、教職員間のコミュニケーション活性化を重視した企画が並んだ。「学生と歩く、上智と四谷の魅力再発見まち歩きプログラム」など3つのプログラムには学生も参加した。続く懇親会は、参加プログラム別に開催され、ともに課題に取り組むことを通して親睦を深めた教職員、学生たちが談笑する姿が見られた。

■永年勤続者表彰

勤続25年および15年の教職員が表彰を受けた。アガスティン理事長は、「長年にわたるご尽力に感謝いたします。25年あるいは15年のご経験とともに、学院のさらなる発展のために力を発揮していただきたい」と述べた。



先哲に感謝を捧げるミサ

続けて、永年勤続者を代表して、青木研経済学部経済学科教授が、「25年を経ても変わらないもの、それは上智大学の理念です。変わらぬ理念を貫くには、社会情勢に合わせた大学の変化も



クイズを解きながら進むまち歩きプログラムの紀尾井町ルート

必要で、そのために微力ながら尽力を続けたい」と謝辞を述べた。

本年度表彰された永年勤続者は以下のとおり。

※()内は所属。敬称略。

勤続25年(17名)	
佐藤朋之(ドイツ文学科)	久森紀之(機能創造理工学科)
加藤浩三(国際関係法学科)	伊呂原隆(情報理工学科)
森下哲朗(国際関係法学科)	森下園(短期大学部英語科)
青木研(経済学科)	神谷雅仁(短期大学部英語科)
川西諭(経済学科)	栗原康行(環境整備グループ)
中里透(経済学科)	岩田孝一(学事センター)
中野晃一(国際教養学科)	大川玲子(学事センター)
YIU ANGELA(国際教養学科)	野尻真希(ウェルネスセンター)
高井健一(機能創造理工学科)	
勤続15年(27名)	
澤田稔(総合人間科学部)	飯田巧(環境整備グループ)
安西明子(法律学科)	原政孝(環境整備グループ)
高島亮(総合グローバル学科)	黒田健吾(人事グループ)
福武慎太郎(総合グローバル学科)	鈴木宏祐(人事グループ)
井坂直人(国際教養学科)	渋谷鮎美(財務グループ)
GRAMLICH-OKA BETTINA(国際教養学科)	中田綾(財務グループ)
THOMPSON MATHEW(国際教養学科)	藤井詩乃(財務グループ)
齊藤玉緒(物質生命理工学科)	櫻井はるか(学事センター)
鈴木教之(物質生命理工学科)	宮崎浩平(学事センター)
南部伸孝(物質生命理工学科)	江村知将(図書館)
高岡詠子(情報理工学科)	来栖朋子(図書館)
狩野晶子(短期大学部英語科)	小泉安里(研究推進センター)
福庭規子(経営企画グループ)	高橋惠梨香(研究推進センター)
小野寺晶子(総務グループ)	

ナーシングコミットメント・セレモニー 看護学科2年次生を祝福

10月5日、総合人間科学部看護学科のナーシングコミットメント・セレモニーが聖イグナチオ教会主聖堂で開催された。このセレモニーは、看護職を目指すにあたり、本学の精神と看護の技術を表す「手」に司祭から祝福を受けるもので、2年次生を対象に毎年10月に行われている。

校歌斉唱の後、石川ふみよ看護学科長が挨拶に立ち、絵本作家である谷川俊太郎氏の詩、「手と心」を引用しながら、「人がプロフェッショナルへと成長するための7割は、直接経験によって決まると言われている。この違いは経験から学ぶ力の差。今後どのような道を選んだとしても、難しい課題に取り組み、自身の思考や行動を振り返るとともに成長したと思えるところを見つけ、それを喜びにできることを願います」と式辞を述べた。

聖書朗読、司式者からのメッセージに続いて、アントニウス・フィルマンシャー神父と増田健神父から学生一人ひとりに「手」の祝福が授けられた。その後、人格の陶冶をめざす「学術の灯」と全人的ケアリングをめざす「看護の灯」を表すメインキャンドルの灯りが、2人の4年次生によって2年次生のキャンドルに受け渡された。

サリ・アガスティン理事長と隣道佳明学長の祝辞の後、2年次生代表の橋爪彩加さんが「私たちの手を医療現場に欠かせない様々な役割を持つツールとしていくために、講義などから身に着けた知、これまで演習の授業で習得した技、あたたかい心をこれからも磨いていこうと思います」と謝辞を述べ

た。最後に聖歌「Here I am, Lord」を歌い、式は終了した。



司祭から「手」の祝福を受ける



謝辞で今後への新たな決意が述べられた

ヨルダン王国王子殿下来校 教員や院生と 幅広いトピックスを議論

11月14日、日本とヨルダン・ハシエミット王国(以下、ヨルダン)の外交関係樹立70周年を記念して来日していたアル=ハッサン・ビン・タラール王子殿下(以下、ハッサン王子殿下)が上智大学に訪じた。サリ・アガスティン理事長と隣道佳明学長らが出迎えた後、中東地域やイスラーム研究を専門とする教員や大学院生とラウンドテーブル・ディスカッションを行い、学部生も聴衆として参加した。

会場では、主宰者の赤堀雅幸研究機構長の挨拶およびアガスティン理事長の歓迎の辞に続き、ハッサン王子殿下による基調講演が行われた。基調講演でハッサン王子殿下は、戦闘状態が続く中東地域の情勢や、今なお現地で甚大な被害に苦しむ市民の状況や子どもたちへの影響を紹介し、「中東地域が国際政治上で新たな役割を果たしてい



聴講した学生と握手を交わすハッサン王子殿下

くうえで、日本にもぜひサポートしてほしい」と力強く訴えかけた。

続いて、国際協力人材育成センター長の植木安弘教授が進行を務め、博識なハッサン王子殿下と政治、経済、地政学、教育、ジェンダーなど幅広いトピックスについて意見交換がなされた。

ラウンドテーブルに参加した博士後期課程グローバル・スタディーズ研究科の学生は「ハッサン王子の非常に幅広い知見のもと、(国土の約75パーセントが砂漠地帯のヨルダンで)水のネットワーク組織を立ち上げたり、科学技術に関する研究所を設立されるなど、グローバルイシューに対する熱意とその解決に向けた実践力に大きな感銘を受けました」と話している。

オンライン企画展開催中

「For Others, with Others—そのルーツと実践—」

ソフィア・アーカイブズでは、第5回オンライン企画展「For Others, with Others—そのルーツと実践—」を公開中だ。

本学の設立母体であるイエズス会は、聖イグナチオ・デ・ロヨラが、パリ大学の同志6人とともに創立し、1540年にローマ教皇パウロ3世から認可を受けた男子修道会で、創立当初から、学校教育が青少年の人間形成と社会変革に貢献すると認識し、重要なミッションと位置づけ

てきた。

本展示第1章では、「イエズス会と学校教育」と題して、1990年以降の活動をいくつか紹介し、イエズス会の特徴的な教育精神であるFor Others, with Othersの理念がどのように生まれてきたのかのルーツを辿っている。

第2章では、「上智学院の社会貢献活動」と題して、上智学院の設置校である短期大学部、広島学院中学校・高等学校、六甲学院中学校・高等学校、栄光学園中学高等学校、上智福岡中学



高等学校における、国内外での社会貢献活動について紹介しており、For Others, with Others の精神がどのように受け継がれ、実践されているのかがわかる内容になっている。

■オンライン展示はこちらから

■問合せ先

ソフィア・アーカイブズ
Sophia-archives-co@sophia.ac.jp



第78回ソフィア祭

多彩な企画で来場者を魅了

第78回ソフィア祭(学園祭)が、11月1日から4日にかけて開催された。今年のテーマは「VIVID」。テーマに込めた「ソフィア祭に関わる一人ひとりの個性という色が、生き生きと、鮮やかに描かれてほしい。そして、ソフィア祭が終わった後でも、思い出が鮮明なまま記憶に刻まれ続けて欲しい」というソフィア祭実行委員会の想いのおおきく、キャンパスは活気に満ち溢れた。

1日の前夜祭は、7号館前の特設会場で行われ、応援団チアリーディング部EAGLESによる開幕宣言の後、上智ナンバー1の歌声を決める「歌うま王決定戦」や課外活動団体のダンス、ライブの他、学生がモデルとして出演するファッションショーなど、熱気溢れるパフォーマンスが繰り広げられた。前夜祭のクライマックスでは、若年層を中心に人気を集めるバンド「moon drop」が特別ライブを行い、ソフィア祭の開幕を華やかに彩った。

3日には本祭のメインイベントの一つである「Sophian's Contest」が行われた。ファイナリストの5人が自身の魅力や活動内容をアピールし、競い合った。グランプリには、自身の経験をもとに「和」の魅力を発信した中嶋未来さん(外英3)が選出された。自己PR部門、SNS部門も制覇し、3冠となった。

4日には例年好評企画となっている「Sophian's Got Talent」が開催された。「新たな未来のスターを発掘するオーディション」というコンセプトのもと、6組のファイナリストたちが各々の特技を披露した。優勝は男女3人組のアコースティックユニット「Acoustar」。3人の絶妙なセッションと圧倒的な歌声が多くを票を集めた。

その他、さまざまな団体による特設ステージでのパフォーマンスや高校生向けの模擬授業・入試相談・学科相談



キャンパス内は多くの来場者で活気に満ちた



「Sophian's Contest」ファイナリストの5人



「Sophian's Got Talent」のファイナリストたち



賑わいの中でフィナーレを迎えた

コーナー、模擬店など、多数の企画が行われた。

閉幕式では、教室グランプリや模擬店グランプリの表彰なども行われ、盛況のうちに幕を閉じた。

ソフィア祭実行委員長の上坂瑞さん(総社3)は「色々大変なこともあり、自身も完璧なリーダーを務めきれたとは思えないが、皆さんのおかげで最終日はとてもよい雰囲気で行われた。特に委員会メンバーたちには、こういった経験をさせてくれたことへの感謝を伝えたい」と、ソフィア祭を振り返った。

音楽協議会主催 第48回音楽祭

テーマは「Brillante(ブリランテ)」

10月5日、音楽協議会主催第48回音楽祭が、越谷サンシティ大ホールにて開催された。音楽祭は、音楽協議会に所属する課外活動団体(全9団体)が一堂に会し、日頃の練習の成果を披露するコンサート。昨年度までよりもさらに大規模な会場に650人を超える観客が来場した。

今回の音楽祭テーマ「Brillante(ブリランテ)」は、イタリア語で華やかに・輝かしく、という意味の音楽用語。各団体が自分の持ち味を発揮して輝けるような音楽祭にという願いが込められている。

箏曲部の演奏で幕を開けた演奏会は、各団体の単独ステージから、有志メンバーがオーケストラ曲に挑戦するジョイントステージへと続いた。ジョイントステージでは、ショスタコーヴィチの「祝典序曲」、プッチーニの「トゥーランドット」が披露された。

最後は総勢100人を超える大編成の有志メンバーが参加したグランドオー



グランドオーケストラは映画音楽メドレーを披露

ケストラの映画音楽メドレーが演奏され、バック・トゥ・ザ・フューチャー、ジュラシック・パークのテーマなど7曲で締めくくった。

音楽協議会会長で管弦楽部に所属する江頭美月さん(総社3)は、「各出演者が真摯に『今この瞬間』と『音楽』に向き合い、何よりも楽しんでいる演奏会でした。その輝きを発揮し、お客さまにお届けできたのは、音楽祭というステージがあったからです。関係者の皆さまに心より感謝申し上げます」と話している。

ひと

学生、作家、母親として 学び続ける

「ファンタジー、恋愛もの、ディストピアなど色んなジャンルのストーリーを書いています。子どもの頃の苦い思い出がベースになっていて、どうしようもない理不尽さの中にも光を見出せるような話が多いですね」

学生でありながら作家としても活躍する佐藤菜月さん(筆名：柳なつき)は、自身の作風についてこのように話す。2014年に『天使は、二度泣く。』でデビューし、現在まで世に送り出してきた作品は書籍化を果たしたほか、新人賞を獲得するなどいづれも注目を集めてきた。

「文章を書いていると心が落ち着くんです。初めは自分自身を癒すために小説を書き始めましたが、作中の登場人物に自分の想いを投影したり、登場人物になったつもりで感情移入もすることもあるので、他者理解も執筆においては重要なテーマです」

佐藤さんは、学生としてはユニークな経歴を持つ。「11年に入学した神学部を一度退学して、他大学で哲学を学び直しています。それも7年半かけて。その間に結婚を経て、21年にまた神学部に戻り、二度の出産を経験して今に至ります」

学生、作家、母親と複数の役割をこなす生活は実に多忙だ。朝4時に起きて執筆活動や宿題をこなし、日



神学部神学科4年 佐藤菜月さん

中は育児に授業と息つく暇もない。そんななかでも、日常生活から着想を得て、メモ帳には新たなアイデアがたくさん溜まっている。

「振り返ってみると、退学したころの自分は若さもあって視野が狭かったのかもしれない。哲学を学んでから改めて神学を学ぶと、物事の見方に深みが出ると感じています。カトリックの宗教観と、悩みを抱える心理描写を描く作家としての矜持は重なる部分も多いですね」

慌ただしい日々の中でも、母親として子どもたちと向き合う時間は特別だ。「子どもたちの日々の成長を見届けられることに幸せを感じています。これからは自分自身のため、家族のため、そして他者のために、『人間の尊厳』を自らのテーマに表現活動を続けていきたいと思っています」

上智大学 第62回荒鷲の集い

1年の集大成として3部一体の演技を披露

11月29日、上智大学応援団が「校歌講習会及び第62回荒鷲の集い」を6号館101教室で開催した。「荒鷲の集い」は、日頃応援に力を尽くす応援団が主役となり、日々の練習の成果を披露する場だ。今年度のテーマは、応援団のスローガンでもある「繋勝(けいしょう)」。今年で64年の歴史を誇るその歩みを未来に「継承」するとともに、関わるすべての人との「繋がり」への感謝を表現しながら、活気あふれる演技・演奏を披露した。

オープニング演技はソフィアマーチから始まり、その迫力ある掛け声と演奏、ダンスで一気に会場の熱気を高めた。在学生やOBOG、教職員など会場いっぱい集まった参加者は、配布されたオリジナルのハリセンと拍手で共に盛り上げた。

第一部では、多くの在学生に校歌を広めることを目的に、2012年から始まった校歌講習会を実施。スクリーンに映し出された歌詞をたどりながら、会場一体となって1番を斉唱した。

第二部は、チアリーディング部1年生のフレッシュな演技から始まり、伝統の第一応援歌、第二応援歌、凱歌などを披露。また、新企画として体育団体連合会の5団体と共に披露したダンスで、大いに会場を盛り上げた。さらに、応援団を構成するチアリーディング部・吹奏楽部・リーダー部の3部それぞれが、今年1年の想いをのせて演技・演奏を行った。コロナ禍に入学し



熱いエールを送る応援団



ハリセンや拍手で応える参加者たち



団長による最後のエール

て思うように活動できなかった時期がありながらも、4年間懸命に応援団と向き合った幹部17人による集大成の演技には、会場から大きな拍手と歓声が沸き起こった。

最後に学生歌、愛唱歌、校歌が歌われ、このイベントを最後に引退する団長による「フレイ、フレイ、SOPHIA」の力強いエールで締めくくられた。